高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.1

高知県立文学館

●入道雲と少年（高知市民図書館蔵・寺田正写真文庫より）

リレー随筆① 磨　甎（ません）――橋田憲明

高知市五台山吸江寺の堂中に、その一額は懸る。この寺に結庵した夢想国師の法嗣であり五山文学の頂点に到る絶海中津の書である。

浦戸より吹き込む汐風に触れ、木目もあらわに出て薄れた文字に、かすかに読まれるのは、「磨甎」。禅のことばで甎を磨いて鏡とする、その不可能なことを成しとげねば、修行しても仏にはなれないという意味だという。

玉ならば磨けば光も出よう。瓦をみがいてもかがやきはえられぬ。己を凡俗の瓦とわかっていても、磨くことをあきらめてはならぬ。その専心の果、奇跡はおとずれて、鏡とかがやくときが来るかも知れぬ。いつまでもかがやかぬかもしれぬ。

僧俗の磨甎の集ひ梅雨の堂
川田十雨

僧もいる。俗人もいる。志すところは一つ。きびしい集いはつづいている。折から雨の降りつつむ堂は、正に壺中の天ともいうべき世界。

秋風や磨甎の額字消えなむと
川田十雨

浦戸の海に吹き起こる秋風が、ひょうひょうと堂のまわりに吹きすさぶ。第一句の「梅雨」、第二句の「秋風」の季題のひびきが、句を貫く。そこに味わいの深さがある。

国師が、付近の風光を賞し、吸江十景と命名した。その中に、白鷺洲、粋適庵、独鈷水、呑海亭などとともに、磨甎堂の名もみえる。吸江寺の後方山中にあった粋適庵は、夢想の参禅の場所、磨甎堂はその南にあった。楠瀬大枝筆「吸江図絵」（佐川青源寺蔵）にむかしの寺のおもかげを偲ぶことができる。吸江寺の庭を出て東の磴をさらに登ると、右手に今の磨甎堂がある。

寺宝の中にある、夢想国師筆の「西来堂」の額、足利義持筆の「吸江庵」の額、いずれも「磨甎」の額と同じ木額で、木目あらわの板に薄々と消えがてにその文字が読まれる。

絶海中津は、義堂周信と同じく、高岡郡津野庄の生まれで、「五山文学の双璧」と称された。明の杭州に留学して、高皇帝から和韻の詩を賜ったことは有名である。詩文集に「蕉堅藁」などがある。

吸江寺の玄関の柱にも、「脚下照顧」と書かれた木札が打ちつけてある。足元をよく看よという意味である。履き物をそろえて入れ。まちがえぬように履いて帰れという意味なら簡単なのだが、己をみつめよ。磨甎の覚悟を持たずに来たものは入るべからずという意味もあるなら、すごすごとひき返さなければならないことになるものもあるのではないか。

瓦をみがくきびしさを、ときどき思いおこして心としたい。文学館の「五山文学」のコーナーに、写真ながら「磨甎」の額を飾らせていただいた。

（高知県立文学館館長）

◆次回企画展によせて◆

夏季特別展

夏目漱石・芥川龍之介展

会期―七月十八日～八月十六日

資料が語る 漱石・龍之介の世界

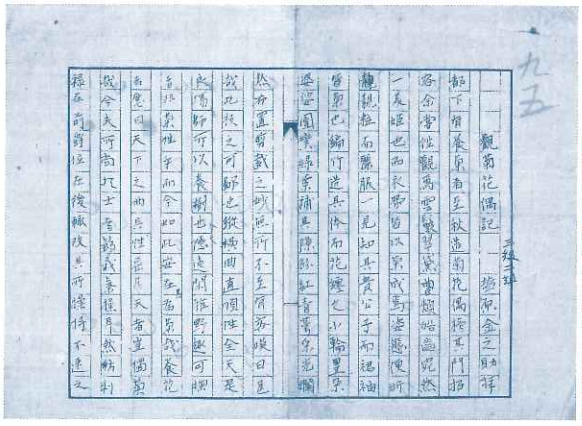
日本近代文学史上に大きな足跡を遺し、今なお多くの読者に読み継がれている漱石と龍之介。この両文豪ゆかりの直筆資料九十点を含む一七〇点の資料で、文学と生の軌跡に迫る特別展を開催いたします。

夏目漱石は幕末維新の激動期、慶応三年にまだ江戸と呼ばれていた東京に生まれました。出品資料の大学予科時代の作文「観菊花偶記」は、最初の英語研究の国費留学生として英国留学を果たし、当時最も西欧に通じた知識人の一人であった漱石の素養の根底には漢文学を得意とする日本の伝統的な文人の血が脈々と受け継がれていたことを示す資料です。またそこに記された〝塩原金之介〟の自署は、漱石の人生に暗い影を落とすことになった養子体験を物語っています。

正岡子規との交流に始まる文学への志向は『吾輩は猫である』、『坊ちゃん』の成功により、東京帝大の教授の地位を捨てさせ、作家・夏目漱石を誕生させました。初期のこれらの作品はユーモア文学の傑作として後世に読み継がれています。しかし、そこには単なる表面的なユーモア小説ではなく、明治という新しい時代に生きた漱石自身も含めた人間関係の複雑さ、その中でもがく人間の赤裸が描かれているといわれます。明治三十七年六月四日付けの野村伝四宛ての自筆絵葉書にはユーモラスな絵で〝僕の気焔を吐いて居る処〟とか〝気焔を吐き過ぎて免職猿廻しとなる処〟と、諧謔的、道化的注釈がつけられていますが、彼の決して大勢に流されない自立する精神が見て取れると思います。

漱石と言えば、彼と交流を持った友人、門弟に正岡子規、高浜虚子、本県出身の物理学者寺田寅彦の他、小宮豊隆、森田草平、野上弥生子、鈴木三重吉、芥川龍之介等、〝漱石山脈〟といわれる明治、大正の時代をリードした錚々たる人物が名を連ねています。漱石と彼らの間で交わされた消息の数々は漱石の文学と思想の深層を伝える貴重な資料です。例えば

野村伝四宛　自筆絵葉書（明治37年6月4日）
（東京都近代文学博物館蔵）



「観菊花偶記」（日本近代文学館蔵）

「河童図」（日本近代文学館蔵）

明治三十九年五月五日付けの草平宛書簡には、島崎藤村の『破戒』を「人生と云ふものに触れて居る」と新しい文学の到来を告げ、高く評価しています。漱石と対極にあると見られている自然主義との関係がその初期においては、新しい文学を希求する目的を共有していたことがわかります。

また漱石は書画をよくし、書家の菅虎雄や画家では橋口五葉、中村不折、津田青楓との交流はよく知られ、漱石作品のほとんどは、彼等の手で装丁されました。特に晩年は『明暗』執筆の傍ら漢詩を作り、南画を描く事を習慣としていました。それらの書画作品群は漱石が憧憬した「則天去私」の境地をよく現しているといわれています。本展に出品される禅の開祖達磨の故事にちなむ「朱衣達磨渡江図」は漱石山房に最後まで飾られていた絵です。

芥川龍之介と漱石の出会いは、漱石の死の前年大正四年十二月のことでした。漱石の「鼻」激賞が龍之介の文壇への華々しい登場の契機となったことは有名な逸話です。漱石が龍之介と久米正雄に宛てた大正五年八月二十四日付け書簡には〝牛の如く歩め、人間を押せ〟と優しく諭しています。漱石はこの新世代の愛弟子の出現に大きな期待を持ち、その若々しい感性との接触は老境に達した漱石の文学に新たな刺激を与えました。

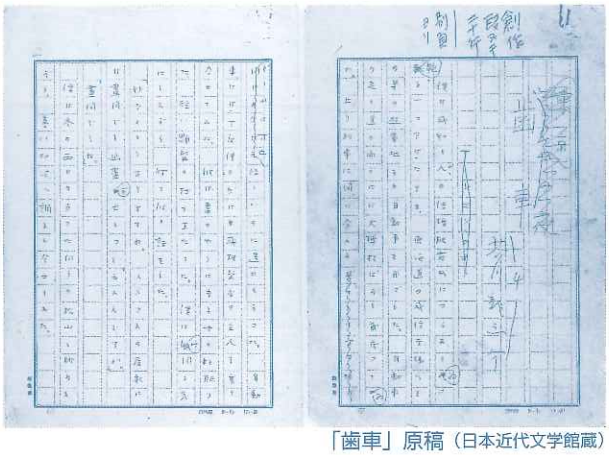
龍之介の文学は、精緻な工芸品のような文体を特徴とし、その初期からすでに古典的な完成を見せていました。しかし、そこには、常に死の影がただよっているといわれます。龍之介は「河童図」を好んで描きましたが、自殺の数ヶ月前に書かれた風刺小説『河童』にでてくる純粋な感受性を持つがゆえに仲間と相容れることができず自殺する詩人・トックは芸術に端正な美を求めた龍之介自身の分身と言えるでしょう。出品資料の数々の「河童図」は時に滑稽に、時に不気味に、時に悲愴的に、それを見る私たちの胸に迫ってくるものがあります。その一つ一つが河童という人間以外の生き物に自らを仮託した自画像であったと言えましょう。

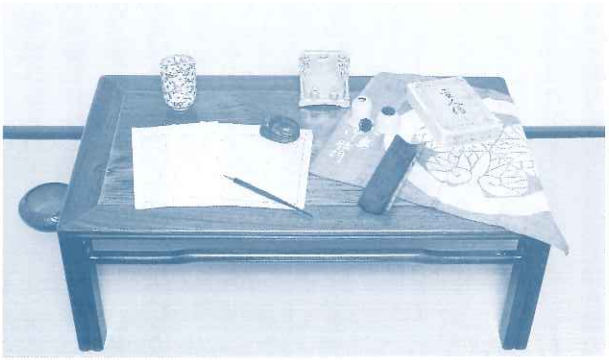
龍之介は古今東西の文献に通じていましたが、その「知性」の源泉は江戸幕府の御数寄屋坊主を勤め江戸の文人趣味を持つ養子先芥川家の家庭環境に求められます。龍之介の旧蔵書には、大正時代の芸術家に少なからず影響を与えた西洋世紀末の作家アナトール・フランス、ストリンドベリ、ポーや芸術家ワイルド、ビアズリー等の英訳本が多く含まれ、それらの蔵書には世紀末芸術に心酔するが如き龍之介自身の書き込みが遺されています。彼自身、「千八百九十年代は最も芸術的な時代だった」とし、「その芸術的雰囲気の中で人になった」と自覚しています。この他、出品資料として「化物帖」や「からかさ図」等の自筆妖怪画や旧蔵書の古今東西の怪奇小説があり、彼の文学の底にわだかまる不可思議なものに傾倒する嗜好を知ることができる興味深い資料です。

一方、龍之介が家族に宛てた子煩悩ぶりや家族への細やかな心遣いを見せる書簡には、芸術至上主義の作風からは伺い知れない意外な素顔を垣間見ることができます。映像コーナーでは、昭和二年改造社の円本宣伝用の映像に残る幼い長男比呂志と次男多加志と出演している龍之介の貴重な映像がご覧になれます。

（学芸課　北川かおり）

死の枕元にあった『旧新約聖書』
1916年４月増刷の米国聖書会社版
（初版：1914年１月）


「歯車」原稿（日本近代文学館蔵）


龍之介遺愛の品々
（日本近代文学館蔵）

【主な出品資料】

＊夏目漱石…「吾が輩は猫である九」原稿、「道草」原稿、森田草平宛・芥川龍之介宛・寺田寅彦宛書簡、「朱衣達磨渡江図」「春日偶成十首」幅等
＊芥川龍之介…「歯車」原稿、「侏儒の言葉」原稿、家族宛・赤木桁平宛書簡、「河童図」、化物帖、旧蔵書、書斎の遺愛品等

【関連催し物】

＊講演会「漱石と芥川―その接点と差異―」
　講師早稲田大学名誉教授　紅野敏郎
　7／19（日）午後2時～4時
＊映画上映会
「それから」森田芳光監督作品・夏目漱石原作
　7／26（日）午後1時30分～3時40分
「羅生門」黒澤明監督作品・芥川龍之介原作
　8／2（日）午後1時30分～3時
▶いずれも文学館1階ホール、入場無料

学芸員メモ

「浜本浩とその時代展」を終えて

「浜本浩とその時代」展 展示風景

雑誌「改造」記者として、大衆文学の旗手として、大正・昭和前期に活躍した浜本浩の生涯を展観した「浜本浩とその時代展」は六月十四日で閉幕しました。

お忙しい時間をさいてご観覧下さった皆様、本当にありがとうございました。開催期間中の出来事をメモの中から拾い書きしてみました。

京都時代の浩と美稲さん（大正九年頃）

吉川英治記念館、吉川文子氏よりお祝いの胡蝶蘭の花鉢届く。（4／23）

大衆文学の先達でもあり、昭和初期からの浜本の親友でもあった吉川英治夫人文子氏（東京在住）のお心遣いに感激。早速電話でお礼を申し上げると「浜本さんにはいろいろ思い出がございますから…」とのこと。その思い出をいつかお聞きしたいもの。

浩の父、浜本利三郎の大正期の自筆日記、短冊、俳誌「おぼろ」届く（4／28）

浜本浩の弟妹でただ一人ご生存の妹さん地主愛（子）さん（九十歳。神奈川県逗子市在住）より。京都への旅の紀行「花より花へ」は当時高知新聞に連載されたという。

「まず第一に人間たれ」
「うゆる声巷にみつるを知らぬがに
酒のみ居るぞあわれ痴れ男」

浜本浩自筆短冊届く。（5／2）

琵琶湖のボートなどを通じ浜本浩と生前から親交があった郷土史家、故橋詰延壽氏愛蔵の浜本浩自筆短冊をみどり夫人が手づから届けて下さる。

宇治土公三津子氏、記念講演（5／2）

一昨年秋、日本近代文学館図書資料部長を退任され、今は大学で日本文学の講義をされている宇治土公さんを迎えての講演会を文学館ホールで開催。演題は―雑誌「改造」と浜本浩―。老若男女熱心な聴講者が朝の大雨にも拘わらず参集。

と言っても同時間帯に平野次郎講演会も県民文化ホールで開催されていたり、当方の力不足、宣伝不足のためもあり四十名足らずの参加に終わったことは残念かつ講師にも申し訳ない。後日企画展を見に来られた方から「講演会もぜひやってほしい」「えっ、もう済んだかね。」と恨まれた。

「浅草の灯」映画上映（5／3と23）

斜めに帽子を被ったイキな上原謙、若いときから美しい高峰三枝子、映画初出演の杉村春子ら今は亡き名優たちが数多く登場する浜本浩原作の松竹映画「浅草の灯」上映会を開催。「昔この映画を世界館で見た」という年輩の方々も。両日で約六十名の参加あり。

「祖父はそれはいい声でロシア民謡なんかをよくうたってました。」
―浜本浩の孫、西村祐美子さん夫妻来高。（6／2）

浩の長女泰子さんの夫、山村恒雄氏の先妻の娘で音楽家の西村祐美子さんが大雨の中、ご主人とお二人で突如ご来館。学生時代は杉並の浜本家に同居し通学していたこともあり実の祖父以上に親しまれたよう。音楽好きで「ステンカラージン」などをいい声でよく歌っていた祖父、浜本浩の思い出をお話し下さった。

「祖父が谷崎先生からいただいたマンドリンを祖父からもらって今でもうちにあるんですよ。」という貴重なニュースも拝聴した。

浅草の青春時代から、晩年まで親交した竹久夢二が大正9年京都時代の浜本にかき与えた画「奈良の白壁」。浜本は当時「野花」と号していた。（夢二郷土美術館蔵）

「土佐は父にとっても故郷でしたが、私にとっても、やっぱり土佐は故郷でした。」
―山村泰子さん母子来高。（6／6）

六月六日、浜本浩の長女の山村泰子さん（八十二歳茅ヶ崎市在住）が娘の佐々木倫子さん（西荻窪在住）とともに空路来高。予想外にお若くお元気そう。浜本浩氏の風貌を彷彿させるような南国的な明るいご表情に「お父様に似ていらっしゃるでしょう。」とお尋ねすると「もう、そっくりなんですよ。」と倫子さん。さもあらん、としばし感心した筆者。

空港から通常の南国バイパスに出るつもりであったが、ふと土佐の海をお見せしようと、前の浜の海岸へ。

「降りたーい。」「お願い、降ろして！」と叫ぶような後部座席の泰子さんの声。

「どうぞ。でもお足元に気をつけて下さいね。」と申し上げ終わらないうちに波打ち際近くへ駆けるようにとんでゆかれた

泰子さん。そして釣り糸を垂れていた男性になにかいろいろと話しかけ尋ねていらっしゃる。小さな魚が揚がるとまたそれに興じておられる。この純粋さは父君、浜本浩ゆずりのものであろう。

「やっぱり土佐の海だわ。」と南国の初夏の日射しと風を小さな体いっぱいに受けながらつぶやかれる。小学校に上がる前まで約六年間を過ごされた土佐を思い起こされ、味わっておられた。

その後、従弟の高木基晴氏（浩の末弟滋氏長男）と合流。高見山の浜本利三郎・律夫妻たちのお墓をお参りし、次いで天神橋、鏡川、チャンピオンの碑、宝町、刑務所あと、お天守（高知公園）などをご一緒させていただいた。

「浜本浩？知らねえなあ」の声にショック隠せぬ泰子さん。文学館入口での出来ごと（6／7）

翌七日、日曜市を散策されてから文学館入口にさしかかろうとするとき隣を歩いていた二人連れのうち男性の方が入口看板を見て「浜本浩？知らねえなあ」と言っていたとのこと。

「『私がその浜本浩の娘でございます。』とも言えなくてねえ…。亡くなってから四十年たつんですもの、そう言われてもしかたがないわ。」とほほえむ泰子さん。

高知新聞社に勤務されていた高橋直通氏の長女、和田房喜さんともしばし館長室で旧交を温められる。

文学館を訪れた浜本浩長女山村泰子さん（中央）、孫の佐々木倫子さん。左端は高橋直通氏（元高知新聞社勤務）の長女の和田房喜さん（6月7日）

企画展「浜本浩とその時代展」、お疲れなのにゆっくりと見て下さった。本当に筆まめでよく手紙を書かれたとのこと。在りし日の父上、浜本浩の写真の笑顔、なつかしい筆跡、数々の著作などを感無量の面持ちで見つめておられた。

幻の名作「大連（ダルニー）」のこと

「大連と書いてダルニーと読みますが、私も父もとても好きな作品がありました。でも検閲で伏せ字だらけで、これではとても本にできない、と父が嘆いていました。」と泰子さん。

知らなかった、そしてこのとき聞き逃せば永久に忘れ去られてしまったであろう浜本浩の幻の名作「大連（ダルニー）」が今も脳裏に焼き付いて離れない。

（別役佳代）

閲覧室から

司馬遼太郎 アジアへの手紙

平成8年に急逝してなお、いまだに多くの人から愛され続ける司馬遼太郎。この本は、時代を見つめ続けた司馬氏が遺した手紙やメッセージが、「アジア」というキーワードで集められたものです。

海音寺潮五郎や開高健、陳舜臣などにあてた言葉のなかから、アジアを見つめる司馬の暖かく鋭い眼差しが浮かび上がってきます。

この中には、「坂本龍馬銅像あて」のメッセージが載せられていて、かつて司馬氏が桂浜の坂本龍馬銅像前に立ち、『竜馬がゆく』を書く決意をしたという時のことも語られています。龍馬の銅像に語りかけながら、司馬氏は同時にわたしたちにむけても大きなメッセージを遺してくれているのではないでしょうか。

◆司馬遼太郎「アジアへの手紙」（集英社、1998・3・31発行、¥2、200）

◆当館閲覧室でご覧いただけます。

県内同人誌紹介

龍巻

昭和七年十月創刊
平成十年六月で通巻七百七十八号
主宰　澤村芳翠

昭和六年四月、来高した高浜虚子が室戸岬に吟行中、それまで花曇りであった空は俄に雷雨となり、岬沖に龍巻が発生した。そして

龍巻に添うて虹立つ室戸岬　虚子

龍巻も消ゆれば虹も消えにけり　同

の名句が遺された。虚子来遊を記念して俳句会の龍巻が発足、翌七年十月、俳誌龍巻が創刊された。運営は幹事の合議によって行われ、川田十雨、楠瀬薑村のち高浜年尾が雑詠選者となり順調に号を重ねたが、昭和二十年一月戦争のため用紙の統制を受け発行不能となった上、同年七月四日帯屋町の発行所は焼夷弾の直撃を受け、会員名簿一切を消失した。同年十一月、松本かをる、町田雅尚、小田春堤等によって復刊され、雑詠選者には高浜年尾のち深川正一郎、高野素十、松尾いはほと選者は交代したが赤字が続き運営が難しくなり、昭和三十四年幹事制を廃し松本かをるが主宰となり雑詠選、主宰の責任に於いて、運営、発行が行われる様になり、昭和五十年十一月よりは澤村芳翠が主宰を引き継ぎ現在に至る。幹事制を廃し、主宰が雑詠選を行うことによって漸く赤字を脱した。日本伝統俳句協会に主宰は属し、虚子の花鳥諷詠、素十の俳句以前の心を信条として会員の指導に当たっている。

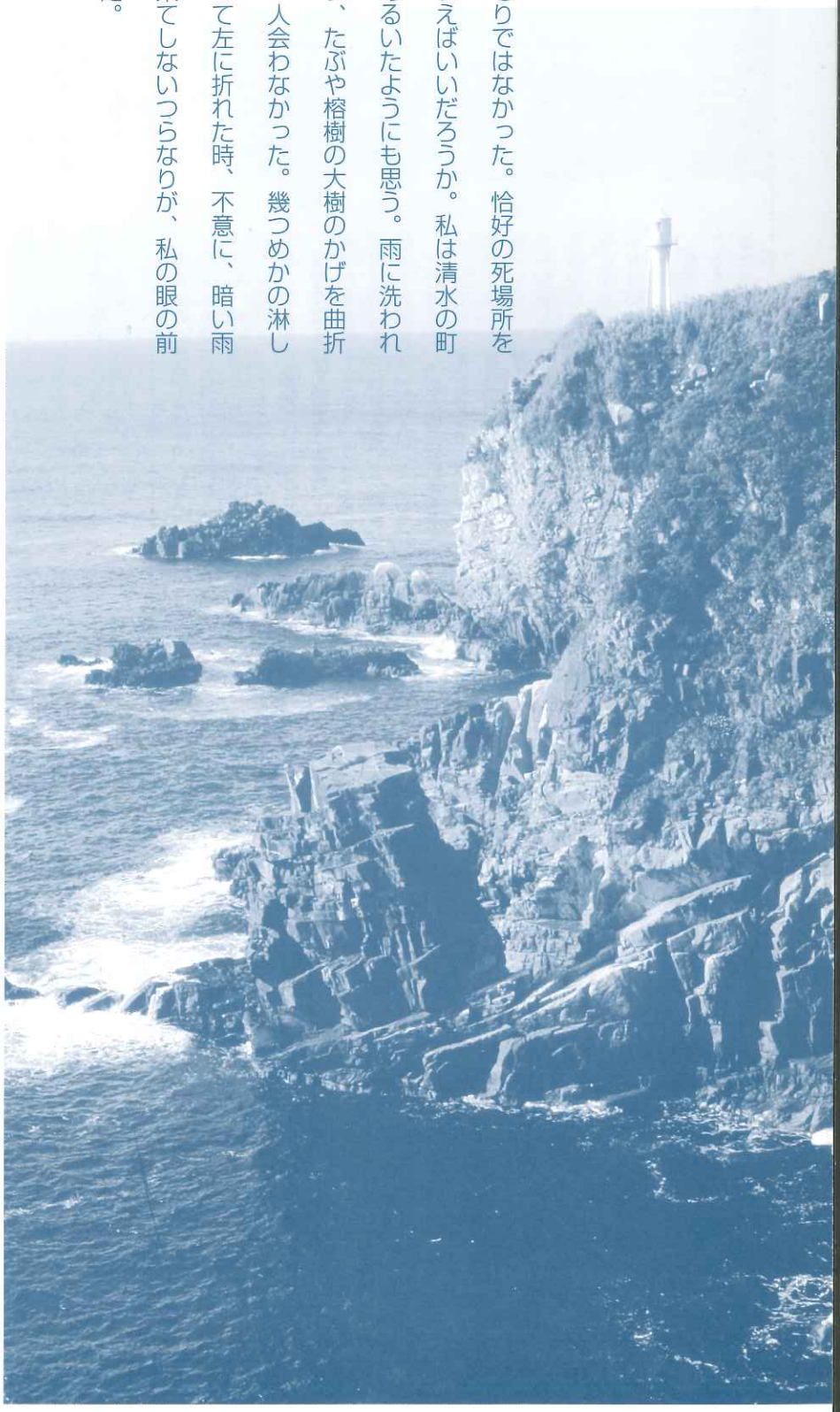
連絡先　高知市上町三丁目九―一八
澤村芳翠方　龍巻発行所
電話　〇八八八―二三―八二二二

土佐文学さんぽ 1

田宮虎彦

「足摺岬」

しかし、その日は私は死ぬつもりではなかった。恰好の死場所を探しに行くつもりであったといえばいいだろうか。私は清水の町並から、その日、二里近くもあるいたようにも思う。雨に洗われた白い県道が馬目樫の林をぬい、たぶや榕樹の大樹のかげを曲折しながら上り坂になった。人一人会わなかった。幾つめかの淋しい部落をすぎ、道が崖肌を這って左に折れた時、不意に、暗い雨雲におおいつくされた怒涛の果てしないつらなりが、私の眼の前にくろぐろとよこたわっていた。



[足摺岬]

ー夢幻と現実の交錯する霊地ー

足摺岬は、高知から西南182キロの距離にあり、四国最南端の岬である。古くは蹉跎（さだ）岬ともいわれた。太平洋の黒潮の流れを、目のあたりに望むことができる。大きな波のうねりが、花崗岩の80メートルの断崖を打ち続けている。段丘の辺りには、椿をはじめとしてウバメガシ・タブノキといった常緑樹が密林をつくり、ビロウ・アコウ・クワズイモなどの亜熱帯植物も繁茂している。

この足摺岬へ、中村駅から土佐清水経由で約1時間20分のバスの旅である。土佐清水市街南東の浦尻から白皇（はくおう）山へ登り、岬の西側伊佐に下りる12キロ半の足摺スカイラインは、快適なドライブコースとして親しまれている。終点でバスを降りて少し歩むと、椿のトンネルの中をゆく自然遊歩道が岬の先端へ向かって延びている。足摺岬には、赤い椿の花がよく似合う。足摺の椿は、ロマンの魅力を秘めている。雨に濡れた岬の椿はひとしお美しい。足摺の椿の花の見ごろは、2月中旬から下旬にかけたころで、観光椿まつりが開催される。

椿のトンネルを抜けると、白亜の灯台が目の前に見えてくる。大正3年（1914）の点灯で、昭和36年（1961）の改修。わが国最大級の灯台で、南国の青い空にくっきりと突き刺さるようにたっている。灯台下の広場には、田宮虎彦の「足摺岬」（「人間」昭和24年10月号）の一節「砕け散る荒波の飛沫が岩肌の巨巌いちめんに雨のように降りそそいでいた」を刻んだ文学碑（昭和54年建立）がある。灯台の背後、緑の樹林の彼方には、四国霊場38番札所金剛福寺が、太平洋のなかに湧き出た仙島の如く浮かんでいる。「砕け散る荒波」ではなく、「泡だちのよいシャンプのような波」（俵万智『かぜのてのひら』）が洗っている、うららかな足摺岬もまた素晴らしい。

金剛福寺は、嵯峨天皇の弘仁13年（822）、僧空海によって開かれたと伝えられるもので、嵯峨天皇の御宸筆「補陀洛東門（ふだらくとうもん）」の勅額をいただく。といっても、仁王門にかかるのは模写したもので、真物は寺に秘蔵されている。本尊は空海作の高さ8尺の千手観音で、左右脇仏はおのおの5尺の毘沙門と不動である。『とはずがたり』の作者、後深草院二条が、僻遠異郷の地足摺岬に足を運んだのも、この千手観音にすがろうとしたためであった。

「足摺へ遠く銀河にそふて来し」は、憲明が金剛福寺の庫裡（くり）の遍路宿から外に出て、夜の足摺突端絶壁の上に立っての句である。芭蕉の「荒波や佐渡によこたふ天の河」を思い出す人もあるかもしれない。この岬は、夢幻と現実の交錯する南海の霊地といえようか。

高知大学名誉教授　岡林清水

8月22日から、高知県立文学館では田宮虎彦の新資料発見に伴う特別ミニ企画展を開催します。

Report

行事報告

（平成九年十一月～平成十年五月末）

平成九年十一月一日（土）午後一時三十分～四時　**高知県立文学館開館記念講演会**を県民文化ホールで開催。土佐山内家宝物史料館長の**山田一郎氏**による、寺田家の内面に迫る**「寺田家の人々」**と**安岡章太郎高知県立文学館名誉館長**による**「ふるさとと文学」**の二講演がおこなわれ、五〇〇人の満員の聴衆を魅了した。

また、十一月二日～十二月二十三日まで、高知県立文学館開館を記念して、本県が生んだ物理学者で随筆家の寺田寅彦と、彼の文学の師である夏目漱石の留学体験を資料で展観した、開館記念特別展**「師弟が見た近代―漱石と寅彦の留学体験―」**を開催。記念講演として、十一月三日（月）午後一時三十分から早稲田大学教授**出口保夫氏**による**「漱石のロンドン風景」**が、十二月十六日（日）午後一時三十分からは中部大学教授**樋口敬二氏**による講演が、文学館ホールにて開催された。

平成十年二月十七日～三月十五日まで、**倉橋三郎氏（作家倉橋由美子の実弟）のさとがえり展―装画・装丁の世界展―**を開催。近年の作品を中心に百数十点の装画と装丁本を対比して展示。装画から装丁まで手がける氏の作品に、会場を訪れる人々は、しばし足を止めていた。

二月二十日㈮には、文芸評論家尾崎秀樹氏による、**第二回土佐菜の花忌記念講演会「尾崎秀樹が語る・司馬遼太郎の世界」**を県民文化ホールで開催。日本とは何かを問う司馬文学の主題に迫った。

この他にも、三菱広報委員会主催、アジア太平洋ユネスコ協会クラブ連盟、社団法人日本ユネスコ協会連盟主催で、**「アジアの子供達の絵日記展」**が二月六日～二月二十二日まで文学館ホールで開催され、多くの家族連れが未知のアジアとの出会いを楽しんでいた。

又、平成十年度春の企画展は**「浜本浩とその時代」**を四月二十四日～六月十四日まで開催。多くの文学者との交友を糧として自らの努力精進で大衆作家としての地歩を築いていった彼の生涯と文学を紹介。好評を博した。

資料受贈報告

（平成九年十一月～平成十年一月）

五十音順・敬称略

▼今井盛章・刊本「小説　智恵子の生き方」田宮虎彦サイン本▼大佛次郎記念会・刊本「おさらぎ選書・一集」・「おさらぎ選集・六集」▼江川俊郎・刊本「ガラスの人形―創作　小品集―」▼菊池寛記念館・刊本「菊池寛伝」▼清宮義子・萬朝報大海戦勝利記念ハンカチ▼久保田昭賢・雑誌「大平山だより」十二号▼小松もとみ・刊本「（歌集）岩を越す水」▼佐竹玲子・刊本「（歌集）櫻三里」▼下町風俗資料館・刊本「下町歴史講座　江戸っ子・下町風俗のおはなし」・「下町の子供の遊び」・「古老がつづる下谷・浅草の明治、大正、昭和8」▼竹村仁志・刊本「ニュー・ウェイブ・ミステリ読本」・「探偵くらぶ上　奇想編」▼津野真由美・「生きるヒント」・「魔都―恐怖仮面之巻―」・「地獄島―お役所捕物帖―」▼東京都近代文学博物館「神谷瓦人文庫資料目録一」▼中村稔・刊本「文学館感傷旅行」▼前川浩一・刊本「岡上菊榮の時代」・雑誌「歴史と福祉」▼三木正之・刊本「ドイツ詩回想・高知」・「バート・ライヒェンハル物語」・「ゲーテ講演（稽古集一）」▼和田敦彦・刊本「読むということ―テクストと理論から―」

このほか多くの方々、団体からご寄贈いただきました。紙面を借りて御礼申し上げます。

◆◆◆文学館日録◆◆◆

［平成九年十一月～平成十年五月末］

11／1　内覧会・開館記念式典。安岡章太郎名誉館長と山田一郎氏が記念講演。開館記念特別展「師弟の見た近代―寅彦と漱石の留学体験―」開幕。

11／2　テープカット・一般公開。

11／3　出口保夫氏講演。この三日館で高知県内外から遺族（寺田寅彦・片山敏彦・田岡典夫・田中貢太郎・タカクラ・テル・黒岩涙香・上林暁・田中英光・岡本弥太・森下雨村・小山いと子・上田秋夫・島崎曙海・大江満雄・若尾瀾水・橋田東声）ほか来館者多数。三日間の一般入館約七五〇名。

11／9　大町芳倫氏（桂月遺族）来館。

11／15　旧制高知高校同窓会の方々来館。

11／16　樋口敬二氏講演。

11／20　高知市民図書館長以下約二〇名来館。山梨県立文学館篠原氏ほか来館。

12／17　東京都近代文学博物館清水氏ほか来館。

12／24　吉備路文学館塩見氏来館。

1／10　黒岩孝さんほか黒岩涙香遺族来館。

1／11　吉備路文学館千田館長来館。

1／27　土屋文明記念館今井氏ほか来館。

1／30　鈴木健二氏来館。

2／7　寺田寅彦記念館友の会二八名来館。

2／15　北海道新聞社四名、松江市長来館。

2／17　倉橋三郎さとがえり展開幕。倉橋三郎氏講演（高知城ホール）。

2／18　地域振興整備公団総裁工藤敦夫氏来館。

2／20　「土佐菜の花忌」尾崎秀樹氏講演（県民文化ホール）。北海道立文学館来館。

2／27・2／28　司馬遼太郎講演ビデオ上映会。

3／12　世田谷文学館菊地氏来館。

3／18　前田そ免子氏（黒岩涙香長女）来館。

3／27　坪井百合子氏（小山いと子遺族）ら来館。

4／4　なだいなだ氏来館。

4／7　東京新聞社来館。

4／24　「浜本浩とその時代展」開幕。

5／2　宇治土公三津子氏講演。

5／3・5／23　映画「浅草の灯」上映会。

5／24　森千代子さん（寺田寅彦遺族）来館

高知県立文学館ニュース　第一号　平成一〇年七月十一日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八八―二二―〇二三二　FAX〇八八八―七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

1998年

7～9月

	7月――July	8月――August	9月――September
常設展示	**ミニ企画展** 現代詩人賞受賞［片岡文雄展］――7月5日まで	**ミニ企画展** ［田宮虎彦展］――8月22日～ 『足摺岬』などで知られる田宮虎彦の新資料の発見による特別企画。未発表作品原稿など、貴重な資料が多数初公開になります。	
催し物	**時事講座** ［大原富枝―人と文学］ 作家大原富枝の、第54回日本芸術院賞受賞を記念して記念講演会を開催。 ＊日時：7月5日(日)13:30～15:00　＊講師：中村稔氏（詩人／日本近代文学館理事長） **専門講座** ［土佐日記を読む］ 7月から、全6回で『土佐日記』をじっくり読んでいく連続講座です。 ＊日時：①7月12日(日)②7月18日(土)③8月8日(土)④8月23日(日) ⑤9月5日(土)⑥9月19日(土)　いずれも13：30～15：00 ＊講師：渡辺輝道氏（高知大学教授） 注）この講座の募集はすでに締め切っております。ご了承下さいませ。	**朗読コンクール** のびのびと声を出して読むことで、子どもたちが文学の楽しみを深めてくれることを願いながら、県内の小中学生を対象に朗読コンクールを実施します。8月から県内3会場で地区予選を行い、11月の2次審査で入賞者を決定します。	**文学カレッジ** 土佐文学への理解をさらに深めていただけるよう、文学館の展示に添った連続講座を9月から来年3月まで毎月開催いたします。　＊毎月第2土曜日13:30～15:00 ●第1回文学カレッジ「土佐の風土と文学」 ＊日時：9月12日(土)　＊講師：岡林清水氏(高知大学名誉教授)　＊定員50名
特別企画展	夏季特別展――［夏目漱石・芥川龍之介展］ 7月18日(土)～8月16日(日)	**関連催し物** ●記念講演会「漱石と芥川―その接点と差異―」 ＊日時：7月19日(日)　14：00～16：00　＊講師：紅野敏郎氏(早稲田大学名誉教授) ●映画上映会「それから」森田芳光監督　＊日時：7月26日(日)　13:30～15:40 「羅生門」黒沢明監督　＊日時：8月2日(日)　13:30～15:00 ※いずれも文学館1Fホールにて。入場無料。	

次回特別企画展予告 10月10日(土)～12月13日(日)

生誕100周年記念
［ヴィジョネール片山敏彦の世界展］

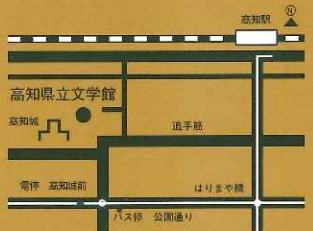
（詩人で独仏文学者で評論家でもある片山敏彦。彼はロマン・ロランとの出会いによってヒューマニズムに目覚め、反戦平和を貫き、独仏文学者と幅広い交流を持ちました。当館に寄贈されたロマン・ロランからの書簡を始めとする貴重な資料を一堂に展示。生誕100周年を記念し、知られざる片山敏彦の世界を紹介します。）

【休館日】7月――6, 13, 21, 27　8月――3, 10, 17, 24, 31　9月――7, 14, 21, 28

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)
休館日	毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日) 年末年始(12月26日～1月1日)
観覧料	一般300円 特別企画展のあるときは、料金が変わります。 20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県長寿手帳所持者及び身体障害者手帳(1・2級)療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●ＪＲ高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩4分
●バス停公園通り下車北へ徒歩4分

高知県立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　0888・22・0231
FAX　0888・71・7857
〒780-0850